＜実践報告と討議から＞

実践報告と討議

報告：田玉英子さん（千曲市立屋代小）
司会：中村哲さん（東信教育事務所）

報告：三輪真裕美さん・川村なな実さん（四日市市立富洲原小）

参加者からの意見

長野県千曲市立屋代小学校の田玉英子さんから「『ぼくは、ぼくの話し方で』～吃音の理解のための『あけぼの』教材作り～」と題して報告がありました。

「ことばの教室」担当者１年目のとき、小学３年生の吃音を伴って話すＡさんと出会います。Ａさんと向き合い、自分の価値観が問われたこと、Ａさんが「分かってくれる人の前では安心してしゃべれる。」と語った言葉の重みを後々まで感じていることについて、報告を通して語られました。

吃音の支援には、「吃音を伴う自然で楽な話し方」と「吃音の悪化の防止」、「周囲の理解」等を大切にする流れがありますが、一方で、「頭では分かっていても、心はやっぱりそうはいかない。吃音を隠したいし、滑らかに話したい。誰も自分を分かってくれない。」と話す中学生のＢさんや、「いつも七夕のお願いの短冊に、“きつおんがなおりますように”って書いている」と話す小学２年生のＣさんとの出会いから、ありのままの自分を受け入れ難い現実があることに気づかされ、この相反する考え方の狭間でどうしていったらよいか悩みながら、現在も、子どもたち、親たちと一緒に歩んでいることが語られました。

そして、周囲への理解を広げていくことを大切にし、当事者の子が自分の話し方で大丈夫だと実感できることを目指す教材作りに取り組みます。子どもたちの言葉から一番ヒントをもらいました。

ぼくは、ぼくの話し方で　（2023 年４月発行の『あけぼの　小学生中学年向け』教材の一部です）

……

このまえ、学年集会のあと、となりのクラスの友だちから
「たつやさんはどうしてそんな言い方なの。」
「ここ、これから、だって。」
と、わらいながら言われたことがありました。ぼくはとてもくやしい気持ちになり、体に力が入り、顔が真っ赤になって、何を言ったらよいのか分からなくなってしまいました。

すると、同じクラスのけいたさんが、
「たっちゃんはそういうふうに話すときもあるんだから、いいじゃん、それで。さいごまで聞こうよ。」……

＜参加者の感想＞

- 「吃音等の障害に対して、まわりからいわれたりすることから嫌な気持ちになる」という言葉が印象的だった。一方で、吃音等の障害が無い方がよいと考える本人や親の思いがあり、支援の大変さが伝わってきた。
- 「吃音だけでなく、その人そのものに対して心を寄せる」「自分自身の今までの生きてきた過程や価値観が問われる」という田玉先生の言葉は、まさに人権教育の本質に触れる言葉だと思う。
- 吃音の人、LGBTQ の人等、まわりにいないことにしてしまっている自分自身をふりかえることができた。
- 障害は、障がい者個人にあるのではなく、障がい者を取り巻く社会にこそあるとの感を改めて強くした話の内容だった。「あけぼの」の教材作成の背景に関わるお話が聞けて、大変参考になった。

（三重県の報告と、古川正博さんの講演内容は、「明日をもとめて 29 号」に紹介する予定です。）

発行所：長野県同和教育推進協議会　住所：〒380-0917 長野市大字稲葉字八幡田沖 2413-11 南俣庁舎
発行人：長野県同和教育推進協議会　会長 中村弘文　　作成責任者：事務局長 清水稔
電話番号 ０２６－２１９－６６３４　ＦＡＸ０２６－２１９－６７４２
E-mail：dosuikyo@bg.wakwak.com　　長野県同和教育推進協議会 HP⟶